



Promised Land

母方の気難しい祖母キャサリンの家から帰ったその日、家はいきなりの来客で、家政婦もナニー(乳母)も忙しなかった。

「お客様だから、お部屋に行ってメーガンと遊んでらっしゃい」

普段から子供に構わない、家業である病院経営に忙しい母親のレイチェルは、クリスをナニーのメーガンと共に彼の部屋に追いやった。

「ティナは？ティナはどこ？」

彼は二卵性双生児の妹、クリスティーナの愛称を呼んだ。以前にも見かけたことのある来客が来てから、彼女の姿が見えなくなった。それが彼に嫌な予感を起こさせた。

「クリスティーナは、お母様とご用があるんですって。さ、行きましょう」

メーガンはすぐに自分を子供扱いすることを、クリスは常々不満に思っていた。僅か10歳の子供なのだから、当然と言えば当然なのだが。学校の友達ともろくに遊べず、この家、アパートとは言え1フロアをぶち抜いたpenthouseが、兄妹2人が授業以外で過ごす世界全てだった彼にとって、周りの大人が何をしようとしているのか、それが自分達にとって不幸をもたらすのかどうかを嗅ぎ取るぐらいは本能のようなものだった。周囲が大人ばかりで同世代の子供がいない環境では、子供は大人の顔色を伺うのに長けるのは当然の事だ。が、屈託ない妹に比べて、勘の鋭い長男が自分達の何を見て、何を感じ取っているか、彼らの両親は気に留めていないようだった。

イースターの祝日も終わろうとしており、学校の課題も祖母の家への行き帰りの車内で済ませた。ティナがいないなら、2人だけの空想ごっこもお喋りも出来ない。しょうがなく、自分の部屋でテレビの漫画に集中しているふりをした。メーガンと、そして、別室にいる母を安心、いや油断させるため。普段ならば暇つぶしにピアノも弾くのだが、ピアノであれば外の気配を感じるのにも、音が大きすぎた。

イースターだというのに、父は秘書のリタを連れて釣りに行っていて家にはいない。母のレイチェルはそんな伴侶の行動も気につけない。彼女にとっては、今は引退した母キャサリンから引き継いだ病院が全てにおいて一番大事なのだ。たとえクリスたちの父、ウィリアムが院長であっても、実質的権力者は理事である彼女なのだから。

それにしても、母はティナをどこへやってしまったのか。嫌な予感は祖母の家にいる時から感じていた。大人たちが自分達2人を引き離そうとしている計画が進んでいるのを、クリスは肌で感知していたのだ。それだけではない。まだ10歳になったばかりのティナに結婚の話が持ち上がっていると、こっそりと聞いてしまった。

(どうせお金がらみに決まってる)

なんとか言う中年親父がティナの結婚相手という。当然、まだ子供である自分達は結婚出来ない。18になったら嫁がせようというのだろうが、それまでに唾をつけておくという事か。それだけならいいのだけれど。結婚した男女がどういう事をするのか、クリスにも知識ぐらいはあった。父が自分の書斎で、リタとこっそりやってる事だ。父は自分が気づいていないと思っている。母ですら気づいているのに。いや、母が知っているのは、気づいているのかもしれない。仲良くするのは、ホームパーティーとか、客がいる時だけ。誰もいなければ、食事さえ別々なのだ。自分達だって前に両親と一緒に食事したのは何時だろうか。祖母の家に家族全員で行った時ぐらいだろう。それでも祖母は、自分達が母にしか話しかけなかった。そんなに嫌うなら、何故父と母を結婚させたのか。分かっている。父は見栄え

が良く、腕が良いと評判の外科医だったから。女癖は悪いけれど。跡継ぎとして、『ぱっとしていた』からだ、きっと。恐らく、自分も遠からず、医者になるべく道を決められてしまうのだろう。その後は、跡継ぎに相応しい、良い家の女と結婚させられる。恋人も作れず、また結婚してから父のように、若い綺麗な好みの女を傍に置くのか。うんざりする。

自分が部屋に『軟禁』されてどのくらいだっただろうか。ドアの開く音がした。大人の足音と。多分、あれはティナの部屋だ。クリスは分かっている、テレビから視線を外さなかった。今、外の動きに気を取られているのを感じれば、きっと彼女のそばに近寄らせて貰えない。それは彼の『本能』が知らせていた。もう少し待つべきだ、と。

と部屋がロックされて、メーガンが立ち上がった。半開きのドアに顔を出して何事か話していた。恐らく相手は母だろう。クリスに聞こえないように話している所から行くと、ティナに関する事なのではないか。クリスはテレビに顔を向けながらも、視線はドアの傍らに立つメーガンに向いていた。耳も、テレビで流れる漫画の音は流れる雑音にすぎず、ドアの方に集中させていた。

「ちょっと出てくるけど、クリスはまだここにいてね」

メーガンはクリスににこりと人工的な笑顔を見せると、部屋を出て行った。クリスは彼女に軽く頷いて、またテレビの方を向いた。耳だけは部屋の外に集中させて。彼女が出て行きドアが閉まると、ゆっくりと立ち上がり、ドアの傍まで行った。耳をあてて様子を伺う。テレビは誤魔化すためにもまだボリュームもそのままつけておいた。外でさっきよりも軽い足音がして、続いて、遠慮がちなロックの音がする。ドアが開く音に続いて、ほんの微かな声が聞こえた。

(ティナだ!)クリスは体が緊張した。何かあったに違いない。頭の中で、警報が鳴る。しかし、今出て行ってはいけないのだ。もう少し。もう少し経って、メーガンがいなくなるまでは…。

もう一度ドアの開く音がした。クリスは慌ててテレビの前に座り直した。メーガンと思しき大人の足音が遠ざかって行く。すぐにティナの所に行きたかった。が、今行くのは早計に思われた。もう一度ドアを開け、部屋の近くに誰もいない事を確認してから、部屋の電話を取り、ティナの部屋の番号を回した。コールしてもなかなか出ない。あまりに鳴らすと、誰かが部屋に駆けつけるかもしれないので、4回で止めた。受話器を置いて、自分がまだティナと同じ10歳の子供である事を呪った。大人達が身勝手な計算で自分達を『陥れようとしている』事は分かっている。なのに、自分の半身たる妹を助ける事も出来ない。唇を噛み締め、電話機を眺めていると、その電話が鳴り出した。まるでクリスの意思を読んだかのように。そっと受話器を上げた。

「クリス？」

消え入りそうに小さな声。ティナだった。

「さっき電話くれた？」

「したよ。ティナに何かあったと思ったんだ」

「あったわ。あの男に、私…」

電話の向こうで、ティナは泣き出した。泣き声を抑えているのが分かる。

「そっちに行きたいけど、メーガンに部屋から出るなって言われたんだ。見つかると、多分ママに言いつけると思う」

「いいの、今は来ないで。来ないで欲しいの。私…ねえ、覚えてる？小さい時、クリスのお嫁さんになるって言ったの」

「覚えてるよ。兄妹じゃなかったら、俺も絶対、ティナをお嫁さんにしたよ」

「兄妹じゃなくても、無理だわ、もう私には資格がないもの…」

「ティナ…」

それが、何を意味しているのか、うっすらとクリスには分かった。まだ10歳。自分もそうだが、まだ子供相手に何て事を。今日、家を訪ねて来た中年男の風体をクリスは思い出していた。『あの男が、俺のティナを絶望させた』。クリスは受話器をぎゅっと握り締めた。怒りで体がわなわなと震えた。

「ティナ…分かってるから。何も言わなくていいから」

声が震えるのは自分の半身が受けた仕打ちへの怒りか、彼女の悲しみと絶望を理解しているからか。「クリスはあたしと同じ年のくせに何でも知ってるのね。パパやママみたいに」

泣き笑いが混在した声でティナが言う。

「知ってるよ、そう、知らなくていいことまでね。でないと、ティナを守れない。なのに守れなかった…ごめん、ティナ」

自分はたった10歳の子供なのだ。大人のやることから彼女を守る事など無理な話だった。それでも無理だと分かっている、守りたかった。

「うん、クリス。分かってる。クリスはいつもあたしの味方で、ヒーローだもん」

「ヒーローは、いつも勝たなきゃいけないのに。俺は勝てなかった」

「分かってる…あ、電話かかって来た。切るね」

ティナとの会話は、割り込んで来た電話で無理やり終わらされた。きっと母に違いない。

母は自分の母にも関わらず、クリスにとってはいつも『敵』だった。もっと幼い頃は甘える事を拒否され、ナニーに預けられた。学校に入ると楽しい事から遠ざけられた。父ははなから当てにしていなかった。褒められた時だけ、他人の前で自慢する、アクセサリーでしかなかったのだから。そして今度はやはり父は役立たずで、母はティナを絶望するまで追い込んだ。母は自分達の母親である前に、祖母キャサリンの娘なのだ。祖母のご機嫌を取り、祖母の為にしか動かないのだ。自分達には、母はいないのだ。

今度はこの部屋の電話が鳴った。

「クリス、居間に来なさい。お客様と一緒にお茶にするから。ティナも呼んだわ」

お茶。お客とお茶だと。ティナを傷つけた、反吐が出るような男とお茶を飲めというのか。どうせ自分が呼ばれるのだから、成績の自慢でもしたいのだろう。学校の成績が何だというのだ。あんな奴と一緒に席でお茶を飲むぐらいなら、目薬でも飲んだ方がましだ-----以前見たドラマで、目薬の成分が体にチアノーゼを起こすというのを見て知っているのだ-----。しかしティナも来るというならしょうがない。

少なくとも、人前で彼女に手を出すような事まではするまい。

「分かった」抑揚のない声で答えると受話器を置き、部屋を出た。自分にとって魑魅魍魎が待ち構える居間に向かって。

居間には、母に寄り添われたティナがカウチに、もう一つのソファに、昼間に見かけた優男風の中年男が座っていた。その姿を『例の男』だとすぐに理解したが、クリスは母に軽く会釈して、家政婦のアナが立っている近くの椅子に腰を下ろした。

「彼が、お兄さんのクリス？」

例の男が口を開く。しかし、視線はちらりとクリスに一瞬向いただけで、すぐに母であるレイチェルに向き直った。

「優秀だと聞いてますよ。飛び級はなさらないんですか？」

「そんな事して、友達を減らしたくないんです」

クリスはよそ行きの優等生の顔で答えた。レイチェルは、その回答に満足したようだった。隣にいるティナの顔が青ざめている。思わずそちらに目が行き、眉間に皺が入る。アナが、ジンジャー・ビスケットを載せた紅茶のカップをクリスに手渡して来た。小さく礼を言って受け取った。

また、その男と母レイチェルは何か話していたが、クリスには全く耳に入らなかった。ただ、母の隣にいるティナだけが心配だった。しかし、露骨に見るわけにもいかず、視線だけをそちらに向けていた。と、母にもたれ掛かるように座っていたティナが、ふわりと立ち上がった。まるで体重を感じさせないような軽い足取りで、バルコニーへ向かう。レバーに手を掛けて、扉を開けようとしていた。

「ティナ、まだ寒いわよ」

「大丈夫よ」

近くに寄って話すなら今しかない、と思い、クリスは皿を置いて立ち上がり、ティナが開けようとしていたレバーのロックを外した。

「ありがとう」クリスにしか聞こえなかったであろう小さな声で言う。

ティナが先に、続いてクリスがバルコニーに出た。風はまだ母の言う通りまだ冷たかったが、部屋の中の見えない澱んだ空気の中にいるよりはましだと思った。

「クリス！私、神様の所に行くの。汚れちゃったから天国には入れて貰えないかもしれないけど」と早口で言うやいなや、ひらりとバルコニーの手摺に上がり、止めようと伸ばしたクリスの手が、こちらを向いたティナのスカートを掴もうとして、そこにいた筈の彼女の周りであった空気を抱いた。

「ティナ！」叫んだクリスは下を向いたがよく見えなかった。そのまま黙ってバルコニーから部屋へ、部屋を出て廊下へ走り抜け、勢いよくドアを開けてエレベーターのボタンをせわしなく叩き続けた。到着を告げるベルが鳴ると、背後で大人達が騒ぐのをよそに、ゴンドラに乗り込むと閉のボタンをやはり連打した。地上に着くと、ティナが落下したと思われる場所には、もう人だかりが出来ていた。遠くにサイレンも聞こえる。クリスはその人垣をかき分け、周りの大人が止めるのも聞かず、傍まで行って膝まづいた。

「ティナ・・・」

体は凍ったように感じた。目の前にいるティナは、まるで人形のようなようだった。仰向けに倒れ、頭の周りに血だまりが出来ていた。もう、ぴくりとも動こうとしなかった。顔色はまだ青白かった。鳶色の目は、どこか遠くを見つめ、もうクリスを見る事はなかった。血だまりは大きくなり、まるで薔薇の花束に囲まれているようだった。

「ティナ-----ッ！」

追いついてきたレイチェルと、メーガン、そしてさっきの男が降りてきたのだ。レイチェルはクリスを突き飛ばす勢いでティナの遺体の傍にやはり膝まづいた。その姿を見ても、涙は出なかった。ただ、胸の中には、もう自分の味方も、半身もないのだという絶望しか。クリスは、まだティナをじっと見つめていた。急にレイチェルが振り返った。

「自分の妹が死んだっていうのに、この子は涙も見せないなんて・・・！」

彼女の平手打ちが飛んできた。

「レイチェル。クリスマスもショックなんだ。君と同じくどうしていいかわからないんだよ」

「おお、ホルムズ。あなたは他人だから、そんな事が言えるのよ。子供を失った親の気持ちなんて・・・」

そこから再びレイチェルは泣き崩れた。その姿をクリスマスは冷めた目で見つめていた。子供だって、ショックで言葉を失うことだってある。生まれてからずっと一緒だった分身を目の前で失った、この残酷すぎる情景を、死者と同じく10歳の子供に見せないようにするより、母にはもっと大事な事があるのだろう。たとえば、子供を失った親が悲嘆に暮れる様子を周りに見せるとか。本当は政略結婚させる筈だった算段が狂ったのをどうしようか、とか。

サイレンの音が大きくなり、パトカーから降りてきた婦警が近寄って来て、クリスマスをティナの傍から引き離そうとしていた。しかし、クリスマスは微動だにせず、半ば抱えられるようにして、レイチェルと共に、パトカーに乗せられた。

母と並んで婦警と後部座席に座ったクリスマスは、レイチェルに握られた手を振りほどき、足元だけを見ていた。涙は、一粒もこぼさなかった。

この日から、クリスマスは本当に『独り』になった。

クリスへの警察の事情聴取はすぐに終わった。

彼が亡くなったティナと同年の子供であった事や、事実を淡々と、とぎれとぎれに語った事で、女性刑事はクリスをすぐに解放してくれた。勿論、ティナの名誉の為にも、親が勝手に決めた婚約者らしき男が何かしたであろうという事は伏せた。ただしレイチェルの方は、かなり時間がかけられたようだった。元より、10歳の子供がバルコニーから飛び降りて自殺を計ったのだ。母親はすぐそばにいた上に、子供の変化に気づけない筈がない、と言われれば、如何に子供の事を気にかけていなかったかは彼女も認めざるを得なかった。ただし、ティナに結婚話が進められていた事を彼女が話したのかどうかまでは、クリスも分かっていない。しかし、ティナの葬儀の後、『婚約者』がお見舞いにしてはあまりにも多額の寄付を病院にした事で、彼はティナに手を出した事を暗に証明したようなものだった。

ティナとクリス、2人の世話をしていたナニーのメーガンは解雇された。残った子供が男子であることから、男性の方が年齢的にもそろそろ適しているだろう、との両親の判断だとメーガンから聞いた。家を去る日、荷物をまとめたメーガンは学校から戻ったクリスの部屋を訪れた。

「クリス、元気でね」

メーガンの笑顔は、この何ヶ月かは見たことのない、自然なものだった。

「それから」

急に彼女の声が小さくなった。

「クリスは賢い子だから大丈夫だろうけど、『1人』でも頑張るのよ。今まではお仕事だから言えなかったけど・・・あなたはこの家で本当に一人ぼっちになってしまった」

「分かってるよ」

言われなくとも、という意味ではなかった。メーガンの意味する所を正確に理解した、という意味で答えた。

「くびになった事は私は恨んでないから、その事で怒っちゃだめよ。表向きはティナの事で責任を取ってって事になってるけれど、次のお仕事の先は紹介してもらったから」

と目配せした。クリスは、メーガンが実は母の味方ではなかった事を理解し、抱擁のために腕を伸ばした。彼女も腕を広げて、背の伸びてきたクリスのまだ華奢な体を抱きしめた。

「さよなら、メーガン。元気でね」

「さよなら、クリス」

メーガンの腕が離れ、彼女は部屋を出て行った。

閉じられた扉を見て、クリスはティナの葬儀以来ずっと考えていた事をもう一度考えていた。メーガンの言う通り、自分はこの家で一人ぼっちなのだ。心を開ける相手も、全てを分かち合う相手も、そして守るべき半身もこの世にいない。みんなティナを天真爛漫な少女と考えていたけれど、それは違う。確かにそう見えていただろうが、彼女は自分の矜持を守るために、バルコニーから飛び降りたのだ。自分の身にどういう事が起きたのかを正確に理解していなくとも、穢された事だけは理解していた。これ以上の自分への陵辱を許さないために、彼女は空に向かって飛んだのだ。だから母は、その代償を払わなければならない。

この家でたった1人の子供になってしまったクリスに両親は、いや母は多大な期待をかけている。男子故に形は違うだろうが、遠からず結婚相手の選定や進学先の決定などもなされるであろう。そのレー

ルには乗ってやる。けれど、決して母の思うような未来など来ない。絶対に自分の人生を彼女たちの思うようにはさせない。裏切って、裏切って、裏切り続けてやるのだ。

翌日、学校から戻ってエレベーター前の扉を開けると、母の声がした。

「クリス？戻ったんなら、後で居間に来て頂戴」

どうやら早速何か動き出したらしい。構わない。絶対に自分は母の思うようにはならない。決して屈しない。

「はい、ママ」 客がいる事を考慮して優等生の返事をして、自分の部屋に入った。

鞆を置き、居間に向かった。深呼吸してドアをノックし、母の許可する声を聞くと、ドアを開けた。母の座った一人がけソファの前に、1人の青年が座っていた。くすんだ、やや長めのブロンドに緑の眼、人懐っこそうな笑みを浮かべてクリスを見ている。チノパンにポロシャツ、更に上等そうなジャケットにローファー。母の好みそうな、『優等生』だった。

「クリス、紹介するわ、メーガンの後任。あなたは男の子だから、これからの事を考えたら、男性の方がいいでしょう」

レイチェルの言葉を待っていたかのように、青年は立ち上がり、クリスに手を伸ばした。

「やあ、クリス。ジェフリーだ。ジェフって呼んでくれ。君の事は弟だと思って接するつもりだから、君も僕を兄みたいなものだと思ってくれればいい」

クリスがジェフの手と顔を交互に見ている間も、ジェフは差し出した手を引っ込めようとはしなかった。渋々クリスはその手を握った。

「クリス。彼はあなたのナニーと言う事になっているけど、家庭教師でもあるの。何でも聞きなさい」

メーガンはいなくなり、また母の代わりに監視人が増えたというわけだ。さて、どうやって手懐けようか。味方に出来ないなら、上手く騙しおおせなければ。

「よろしく、クリス」

ジェフはクリスの手を握った手に力を込めた。クリスは再び優等生の笑顔に向けた。「よろしく、ジェフ」

「じゃあ、さっそく君のお城を見せてくれるかい？」

つまり、部屋に連れて行けということなのか。

「うん。じゃあ、ついて来て」

ここは、素直に彼に従い、母の目から離れた方が良さだろう。それに、母の目もごまかせる。そう思い、クリスはジェフを従えて自分の部屋に向かった。

部屋には、セミダブルのベッドに机と椅子、カウチとテレビセット。机の横に、どうやらジェフの為に用意されたであろう、同じような椅子が1脚増えていた。その椅子を勧めようとした時、ジェフは先にカウチに座った。一瞬、クリスは眉間に皺が寄りそうになるのを堪えた。

「ここに座らせてもらうよ。まずは、仲良くならなきゃ。その為にはリラックス、リラックス」 屈託なさげな笑顔で言う。

(厚かましい奴だ。それならこちらも、仲良くなったふりをした方が良さそうだ)

「クリス、君もここに座りなよ」

ジェフは自分の隣の座面をぼんぼんと叩く。クリスは、内面は渋々と、しかし表面的には、恥ずかし

げな風情で、ジェフの隣に腰を下ろした。

「そうか。従兄弟とかもいないんだね。じゃあ、年上の男って、お父さん以外はいないんだ」

うつむき加減だったクリスは、ちらりとジェフを見て頷いた。

「恥ずかしがらなくていいよ。まだ妹さんが亡くなってそんなに経ってないから、ショックも抜けてないよね。それだけじゃなくて…君は今、いくつだったっけ？」

「10歳。6月で11」

「そうか。多分、もう少ししたら、いや、早い子ならもう始まっているけど、体がどんどん変化し始める時期だ。お父さんも忙しそうだし、お母さんじゃ、難しいからね。だから、そういった事も教える為に僕が雇われたって訳だ」

体の変化。それは本で読んで知っていた。だからこそ、ティナの危機も感じ取れたのだ。そして、自分に引き始めてる事も。

ジェフの言葉にさらに俯いたクリスを見て、ジェフが何かに気づいたような顔をした。「もう『生えて』来た？」小さな声で言う。

「生えてって、何が」意表をつかれたクリスは、言葉も詰まり気味だった。

「その様子だと、多少生えて来てるみたいだね」

くすくすと笑う。確かにジェフの言う通りだった。まだ『生えている』と言えるほどでもなく、柔らかな和毛が少ない面積を覆い始めたばかりだった。

「多分次には、朝起きたら下着が汚れてたりする事が起きる。でも、びっくりしちゃダメだよ。それは、健康な男の子には普通の事なんだからね」

それも、クリスは本で読んで知っていた。そして、健康な男子なら、次にどういった事を始めるのかも。ただ、性に関して知識欲はあっても、そういう事をしたいという欲求は、クリス自身の中に欠落していた。学校でそういった話題が級友たちの中で出ている事は知っていた。女子の誰が最初にブラジャーを着け始めたかの、どの子が可愛いだのと噂している事も。ただ、全て、クリスには馬鹿馬鹿しく見えていたのだ。そんな事を知ってどうするのか、と。

「『自分でする方法』も知らないだろ？」

ジェフの言葉に。再度クリスは眉をひそめた。聞いたことはあったが、自分でするなど考えたこともなかった。

「じっとしてて」 言いながら、ジェフの片手がクリスの肩に回って押さえつけたかと思うと、もう片方の手がクリスの股間に伸びて来た。身を竦めて離れようとしたが、押さえつけられた肩はびくともしなかった。手は緩やかに動き、チノパンのファスナーに伸びた。止めようとしたクリスの手は、肩にあった手が降りてきて両手首ごと掴んだ。必死に力を込めたが、成人男性の力には敵うはずもなかった。

屈辱的だった。ティナもこうした恥辱を味わったのか。唇を噛み締め、ジェフの手の動きに耐えた。が、それが苦痛ではなかった事で、更にクリスは自分に対して怒りをぶつけることとなった。妙なむず痒さと、屈辱的でありながらも、止めてほしくない、という矛盾した気持ちが湧き上がり、憤りは更に強くなった。

突如、何かが出そうな感覚に襲われた。

「ジェフ、待って、僕トイレに…」

「いいんだよ、自然な事なんだから、そのままにして。これはトイレで出すものじゃないんだから」囁

くように耳元でジェフが言う。

これが『そういう事』なのか、と悟った。しかし、それでも、今の自分の姿にしろ、『その時』にしろ、ジェフに見られなくなかった。

「でも、ちょっと待って」

「いいから、我慢しないで」 ジェフの手の動きが激しくなり、何かが出てしまいそうな感覚が頂点まで来た。ジェフがクリスを押さえつけていた方の手で、自分のポケットからハンカチを出して、『それ』を受け止めた。クリスは体がかくかくと震え、すぐに力が抜けていくのを感じた。

「僕の初授業だよ」 にやりとジェフが笑った。

「お母さんには内緒だよ」 そう言って、ジェフはその日は帰って行った。顔合わせの為に、呼ばれただけなのだという。

頭では分かっている、体で実際に体験するのと、ただの知識では大きな隔たりがあるのを、クリスは思い知らされた。父もこれに振り回されて、母を放っておいて、リタと『楽しんでいる』のだ。いや、父が放っておかれたからか。今更どちらでも良い事だった。いずれにしても、大人達が陰でこそこそと蠢いているのは、こういうお楽しみの為なのだ。ならば、自分はその誘惑に負けてはならない。

家庭教師は、その術を教えてくれるだろうか。

家庭教師としてのジェフは、母の見立ては正しかった。

学校から帰ると、部屋でジェフが待っている。一緒に課題を済ませ、学校の授業より先に進んで予習するのも日課となっていた。そうした『真面目な生徒と家庭教師』の関係は初夏が来てても変わることはなかった。

学校が休暇に入っても、ジェフは毎日やって来た。課題は早くに済ませ、今の私立の学校から、よりレベルが高い公立校に移る為に、そこでも成績を保つ為に。

「それにしても 크리스 はか細すぎるよ」

そう言ったジェフは、どうやって母レイチェルに取り入れたのか、丸1日 크리스 を遊びに連れ出す許可を取り付けた。

「アナに言って、タオルとショートパンツを出してもらっておいで」

玄関先でジェフは言った。タオルなど何に使うのか。何か汗でもかくような激しい運動でもさせられるのか、と訝りながらも、アナにジェフに言われた通りのものを出して貰うと、紙袋に入れて玄関まで戻った。

「じゃあ、行こう」

アパートを出ると、青いフォードのクーペが止まっていた。

「お父さんの車を借りるわけにはいかないからね。さ、乗って」

半ば警戒気味に、クリスは助手席の扉を開けた。後部座席にしか慣れていないクリスには助手席のシートは大きすぎ、華奢な体はシートの中に埋もれそうになっていた。それを見つけたジェフがクリスに手を貸し、上体を起こさせた。シートベルトも、大人に合わせてあるので、ベルトの役割を果たさない。それも、横からジェフが調整してくれた。「荷物は後ろに置いとけばいいよ」

体をひねって手を伸ばそうとしたが、背もたれが邪魔だった。やはり、ジェフの手が取り上げ、後部座席に放り投げた。「じゃあ、行こう」

どこへ連れて行かれるのか、家庭教師は一言も言わなかった。ただ、『息抜きも必要だよ』とだけ。

「今からドライブだ」

車はダウンタウンを抜け、郊外へ向かっていた。パークウェイ沿いに更に走ると湖が見えて来た。この地域は夏でも平均気温が低いが、天候によっては水遊びが可能だ。ちょうど今日のようによく晴れた日には。

途中、露店の前で車を止めると、ジェフは一旦車を降りて、ソーダを2本とホットドッグを2つ買って戻って来た。再び車は走り出す。

家庭教師は、鼻歌交じりに車を路肩に止めると、後部座席からクリスの荷物と自身の荷物を掴んだ。

「まず、腹ごしらえだ」

さすがにソーダの瓶は汗をかき、ホットドッグも湯気で湿ってはいたが、こういった物は年に一度か二度しか食べさせてもらえなかっただけに、それでも家の食事の何倍も美味に感じた。食べ終わると、ジェフはクリスの荷物を手渡してきた。

「じゃあ、ショートパンツに着替えて」

「着替えてって・・・」

「湖でもビーチには違いない。水遊びにそのままじゃ動きにくいよ」

クリスは渋々狭い車内で、着替えを始めた。下着も取らないと帰りが困ると言われ、手を掛けたものの、人目がある所というのが気になった。

「男同士なのに、何を気にしてるんだい？」

「でも・・・ジェフは着替ええないの？」

「じゃあん！」

ジェフは腰を浮かせてスラックスをすりと膝まで下げた。中にバミューダパンツを穿いていた。

「先に言っててくれたら、僕もそうしたのに」

クリスは半ばふてくされて言葉を返した。大体が人前で着替えたことなどないのだ。渋々下着を脱ぎ、持参したショートパンツを直に穿いた。やや固い布地が普段は柔らかい下着に包まれた箇所当たる

のが、少し気持ち悪かった。脱いだ下着と服は丸めて紙袋に入れた。

「よし、行こう」運転席のドアを開けて、ジェフが外へ出た。

「行こうって、どこへ」クリスが戸惑っていると、ブロンドの家庭教師は日差しに髪を輝かせながら、助手席のドアを開けて、クリスを覗き込んだ。

「泳ぐんだよ！」

それ以外の選択がある訳ない、とでも言いたげに、掴んだ手を引き、クリスを車から引きずり出した。手を引かれたまま、水際まで半ば小走りで行った。泳ぐと言われても、クリスは泳いだ事がなかった。授業である訳もなく、サマースクールも行かなかった。アパートにもプールはあったけれど、泳ぎを教えてくれる人もいない。かと言って『泳げない』と、この家庭教師に言うのもしゃくに障る。

「クリスは泳げるかい？」

答えに窮し、黙ってしまった事で、真実はばれてしまったようだった。くすっと笑ったジェフが、クリスを手招きした。

クリスが足の届くぎりぎりまで進み、そこからはジェフに手を握られての水泳教室が始まった。幸い、クリスの負けん気とプライドの高さが働いて、水への恐怖は感じずに済んだ。なんとか息継ぎしながら、フォームは美しくなくとも、辛うじて溺れない程度になった頃、やっと2人はほとりまで上がった。

腰を下ろしたクリスは、水から上がると思っていたより疲れている事に気がつき、後ろ手をついて脚を投げ出した。泳げない事も、教わるのも悔しかったが、身につけておかなければ、いずれもっと悔しい思いをすると感じ、意地になっていた。せっかく教えてくれるというのだから、機会は有効に利用しなければ。

2人が座っていた所から少し離れた所では家族連れがバーベキューをしていた。その家族の父親だろう。大きな声で、こちらに向かって何か言っていた。ジェフが立ち上がった。「ちょっと行ってくるよ」

その家族の元へと走って行ったジェフは、紙皿に山盛りのソーセージやスペアリブを載せて戻って来た。

「おすそ分けだってさ」添えられた樹脂製のフォークをクリスに手渡した。

確かに、ホットドッグを食べたとは言え、匂いがかぐと、既に空腹になっているのを感じた。素直に紙ナプキンとフォークを受け取った。

アナが作るバーベキューソースとは味が違った。恐らく市販だろうが、それでも泳いで腹を空かせたクリスには旨かった。若い男と育ち盛りの11歳の少年なのだ。さっきのホットドッグで足りるわけがなかった。皿に山盛りだった肉も、あっという間に食べ尽くされ、空になった紙皿は、2人の座席の境目を示すかのように、カラフルなフォークと共に放り出された。

「君はもっと自由にならなきゃいけないよ」

「え？」

ジェフの言葉があまりに唐突であった為に、クリスは聞き逃す所だった。

「僕は僕だ。自由だよ」

「嘘をつくんじゃないよ。お母さんをごまかしてるのと僕を一緒にしちゃいけない。全部が全部親の言いつけ通りで、クリスの意思で何か決めたり、行動を起こしたりしてないって言ってるんだ。男の子は多少の反抗心がなきゃ強くなれない」

今日二度目の意表を突いた言動に、クリスは息を飲んだ。が家庭教師は柔らかい笑みで彼を見ているだけで、クリスの言葉を待っているように思えた。

そんな事は言われなくたって、とクリスは視線から逃れるように顔を背けて唇を噛んだ。分かっている、そうやって黙って母の言う事を聞いている振りをしてやる方が、後々彼らにはダメージが大きくなりえる。そのための雌伏の時なのだと、クリスは思っていた。しかし、ジェフはさっきなんて言ったか。自分が母を『ごまかしてる』と指摘しなかったか。クリスの言動は、本来母と意見を同じくする

ものではない、と見抜いているというのか。

「なんで僕が母さんをごまかしてるって思うの？」

「大人をなめちゃいけない。もっとも、君のお母さんは自分の願望通りであって欲しいあまり、君の事が見えてないようだけど」

「なんでそんな事がジェフに分かるの？」

出来るだけ、感情の起伏をさとられないように、クリスは質問を重ねた。

「僕も、君のお母さんが好きじゃないから、だろうな」

そうだろう。金持ちの匂いをぷんぷんさせて、人の気持ちなんてわかろうともしない母だ。雇われているジェフにだって、その本性はすぐに分かった事だろう。しかし、それがクリスと同じくするものとは限らない。慎重に言葉を選ばなければ。

再びクリスはジェフから顔を背け、柔らかな波のたつ湖面に目をやった。

「なんで、僕にそんな事を言うの。ジェフがこんな事言ってたって僕が母さんに密告したら、あなたは割の良いアルバイトがなくなっちゃうよ」

「君はそんな事しない」

「なんで分かるの」

「言っただろ。大人をなめちゃいけないって。そんな事ぐらいわかるさ」

「僕にどうしろって言うの」

「どうも。ただ、君が親の言う事を聞いている振りをしながら、少しでも楽になれるよう、手助けなら出来るって言いたかったんだ」

クリスはちらりと目だけで隣を見やった。ジェフもクリスと同じく、湖面を見ていた。

ジェフの申し出は、クリスには願ってもないことだった。それが、真実なら。しかし、まだだ。まだ、ジェフを信じていいのかわからない。それに、まだ今のところは母の言う事を聞いているままでいい。

「まだ今は、僕は君に必要なかもしれない。でも、いつか必要な時が来るよ。大人を出し抜くには、こちらもそれなりに知恵を付けて、上手く立ち回らなけりゃね」

クリスはもう一度振り返った。今度は顔ごと。傾きかけた陽に目を細めながら家庭教師の顔を見ると、ジェフはクリスを見て笑っていた。

クリスは16歳になるうとしていた。

ジェフは相変わらず彼の『ナニー』であり、家庭教師だった。

クリスの成績も両親の虚栄心を満足させるに充分であり、よく出来た子との評判を落とす事もなかったため、クリスの母レイチェルはジェフの給料を上げる事はあっても、解雇する事は考えてもみないようだった。その家庭教師が、雇った当初とは違い、大学生と言える年齢ではない事を気に留める事もなく。

ジェフと一緒に時間は、大半は面白くもないものだったが、家族との食事に比べれば遥かにまじだった。何よりわざとらしくハグしてくる母のつけた香水は、嫌悪しか呼び起こさなかった。

学校の友人と馴染めていなかったクリスに、ジェフは学校で上手くやるための大事な要素-----野球やフットボールのルールを教え、地元チームのゲームにも連れて行ってもらった----も与えてくれた。おかげでミドルスクールに進む頃には、特に親しい友人はいなくとも、それなりに学校生活に溶け込めるようになっていた。息子がいつの間にかフットボールのプレイオフの行方についてアナと話していても、それは子供なら当たり前知っている事のように、両親ともに思い込んでいるようだった。その功績は家庭教師にあるのだと、家政婦のアナも告げることはなかったが、もしかしたら、それすら家庭教師の仕事だと思っていたのかもしれない。

いずれにしろ、クリスは自分には家族らしいものはいないのだと考えていた。少なくとも、級友達が語る『家族像』に自分の家庭は当てはまらない。それを羨望の念をもって見聞きするほどには、クリスも幼くなかった。元より、自分の家族は『もういない』のだ。少女がバルコニーから飛び降りた日から。

クリスの部屋には、1枚だけ写真が飾られている。居間には祖母のキャサリンも入ったの集合写真や、両親の結婚式のもの、クリスとティナが生まれた時のものと、何枚も作り付けの暖炉を模った暖房器具の上に飾ってある。アナから、クリスの部屋にも何枚かと言われ、彼はティナが1人で写っている1枚だけを選んだ。

あの年の夏、母の実家の裏庭で撮った写真。まだもっと小さかった頃、2人を溺愛した祖母が出入りの業者に作らせたブランコに、その座面に座るにはやや成長しすぎたティナが座り、カメラに向かって微笑んでいる。クリスと同じ鶯色の瞳、クリスより少し暗いブラウンの巻き毛、華奢な体つき。2人一緒に過ごした最後の夏。彼女の時は、そこで永遠に止まってしまった。

あの頃はティナと変わらなかったクリスの身長は伸び、そばかすも消えた。幼かった頃、同じような巻き毛だった髪は、緩やかなウェーブがかかってまだ幼さを残した顔を囲んでいる。母と同じ鶯色の瞳に、母とよく似た薄い唇、面長の顔は成長と共に顕著となり、母方の血を濃くひいているのが分かる。唯一、優しげな下がり気味の目だけは、父親から引き継いだものだ。もっと成長すれば、将来父のように多くの女を泣かせるようになるのでは、と祖母は悪態をつくように言う。手足だけが伸びたかのように、相変わらずほっそりとした体つきではあったが、16歳の少年らしさを損なうものではなかった。それは、スポーツ観戦だけでなく、学校の友人たちとの課外活動として、不定期に野球のメンバーとして駆り出されて培われたものであっただろう。その土台を作り上げたのは、気乗りしないクリスを引きずって、あちこちに、時には自分の友人たちとの集まりにまで、彼を連れ回した家庭教師の功績である。

地元の名士の息子、ただし、そんないけ好かない奴でも気取った奴でもないが、どこか人目を引くところがある。それがクリスの学校での立ち位置だった。この数年で身につけた処世術の結果だ。

一体、ジェフがいなければ自分は今頃どんな風になっていたのだろうか。

クリスはたまに想像してみる。

ジェフが、彼を初めて湖に泳ぎに連れて行った時に言った言葉が思い浮かぶ。

『大人を出し抜くには、こちらもそれなりに知恵を付けて、上手く立ち回らなけりゃ』

その言葉は半ば正しく、半ば誤りだった。母親は、彼の男の子らしい成長を喜ぶ反面、級友たちとスポーツに興じているのは、あまり気に入らないらしい。怪我をしないかと過保護であるのも一つだったが、それ以上に、そういった場で自分の息子が花形になれないのが、一番の理由だった。

(自分はジェフに依存している)

クリスにとってそれは、認めたくない事実だった。自ら頼ることこそなかったものの、彼の進言に従い、渋々とは言えその通りに行動してきたことで、今のクリスが在る。家庭教師は着任した時の言葉を裏切ることなく、兄のようにクリスを導く存在として責任を果たしている。初めは感じていた不信感も、反感も、クリスは自分でも驚くほどに薄らいでいる自覚があった。かと言って、兄のように慕う訳でもない。そうするようジェフも無理強いしない。そうして少しずつ縮まる距離感を、ジェフは半ば楽しんで観察しているようにクリスには思えた。そしてまた、クリス自身も。

それを薄々自覚するようになったのは、ここ数ヶ月の事だろうか。

明らかな『味方』でもなく、両親のように『敵』でもない。

それまではクラスメートと同じ、有象無象の中の1人にしか過ぎなかった。いや、実際にはそうではないのだが、クリスの頭の中での位置付けはそうだったのだ。

クラスでも特定のグループには属さず、孤立するでもなく、しかし地元名士の息子という背負ったものは、クリス自身では変える事は出来ない。すでに大人並の打算を以てお近づきになろうとする少女達をかわす際、どうすればいいのか。戸惑った時に脳裏に浮かんだのはジェフだった。

こんな時、ジェフならどうしただろう。彼ならクリスにどう進言しただろうか、と。

ただ頑なに周囲を拒絶するのではなく、自分のイメージを作り変え、周囲をコントロールする事で、こんなに楽になるのだと教えてくれたのは、彼だった。本心から打ち解けていなくとも、相手を好きでなくとも、どれだけ周囲を見下していようとも、それを表に出さなければ良いのだ、と。たとえ、それが親であっても。

そう言われた時、昔、彼の言った言葉を思い出した。

『僕も君のお母さんが好きじゃないからだろうな』

あの時、まだ11歳になったばかりの教え子に、事も無げにジェフは言った。あの日は信用出来なかったその言葉が、初めて信憑性を帯びた。

『じゃあ、ジェフは僕のこと好き振りをしてるんだ』

からかうような口調で言ったものの、その実、クリスは不安だった。ジェフに比べれば自分はまだまだ子供で、彼の本心は読み取ることができずにいた。どういう答えが返って来ても、それを疑うことは容易だ。

『振りをしてるんなら、最初から自分の手の内は明かさなよ』

ブロンドの家庭教師は、緑の目をくしゃりとさせ、声を出して笑った。

本心かもしれないし、クリスをけむに巻くための言葉かもしれない。が、無意識のうちに、クリスはその言葉は本心からだと信じようとしていた。同志とまではいなくとも、自分の味方が欲しかったのかもしれない。事実、クリスは自分でも気づいていなかったが、ジェフと一緒にいる時が一番リラックスしていたのだ。頭でそれを理解していなくとも、体は、本能は、彼の本心に素直だった。

自分を抱きしめる腕の感触と、脳を突き抜けるような快感に、悲鳴にも似た声をあげそうになって、クリスは目を覚ました。

横たわったまま身動き、パジャマを着た下半身の不快感に気がついた。

毎日ではないが、こうして朝を迎える事がこの数年ふえて来た。それが何なのかは本で読んで早くから知っていた。『自分でする方法』も、以前強引にジェフに手ほどきされた。それでも、進んで試みようとした事はなかった。どうせ、こうして放出されることを知識として知っている。

今まで、欲情らしきものは感じたことはなかった。少なくとも、起きている間は。しかし、夢の中のクリスは、明らかに誰かの手で触られて喜んでいて。いや、自分がではない、と彼は信じたかった。喜んでいてのは自分の体だけで、自分の意思ではない、と。現に、その手や、自分の体を抱きしめる腕の持ち主も分からないのだ。単なる生理現象の一つに過ぎない。ただ、そういった肉体的接触へのぼんやりとした憧憬かもしれないではないか。

相変わらず、学校で媚びを売るクラスメートの女子にも、チアリーダーの花形が見せる脚線美や、丸みを帯びた豊かな胸元にも、惹かれたことはなかった。級友たちが好みの女生徒の話をしている時にも、そこにはいないタイプをあげて誤魔化した。それを訝ったり、不審に感じる者も周囲にはいなかった。家族より近い存在とも言えるジェフですら。

いつかは自分も結婚して子供をもうけることになるのか。

まだまだ先の事とはいえ、クリスもたまに考えることはある。しかしその空想はすぐに断ち切られてしまう。子供をもうけるという事は、女と『あれ』をしなければならないのだ。男女のセックスは、クリスにとって即ちティナを死に追いやった行為を意味した。もしくは自分達家族を放置して、父がリタと陰でこそこそとやっている事。そう思うと、性行為自体が禁忌というよりも嫌悪すべき行為としか思えなかった。

一度、ジェフに聞いてみたことがある。ガールフレンドとそういう事を-----セックスという言葉は使わなかった-----するのか、と。

ジェフははじめ何を言われているのか分からない表情をし、次の瞬間に爆発したように笑った。

『そんなに笑わなくてもいいだろ』

クリスは思わず口を尖らせて拗ねたような顔をした。ジェフはそれをなだめすかし、さらりとクリスの疑問を肯定した。

『普通の事だからね。クリスもしてみたいだろ？』

問いかけに、素直にうなずけなかった。いや、全くうなずけず、押し黙ってしまった。いつかはする事になるのだろうと漠然と想着いても、欲求がなかったのだから。

『分からない』としか答えられなかった。

学校から戻ると、クリスはいつものように自分の部屋に向かった。既にジェフが待っているのを知っている。母も病院の理事室にいたので、家にはアナしかいない。何年か前までは、まず台所のアナに挨拶がてら顔を出していたが、最近では、夕方ジェフが帰る時に知らせに行くだけだった。仕事を終えたジェフに、コーヒーとお手製の茶菓子を出す彼女の出番だと知らせるため。

『ジェフも前にいたメーガンみたいに家に住めばいいのに。どうせ客間が余ってるし、ジェフならテ

ィナが使ってた部屋を開けても良いよ』

クリスティーナの死後、彼女の部屋は聖域となり、誰にも使わせる事なく開けてあった。家具の類は母が始末してしまい、何枚かの写真と机だけが残されている。訳の分からない母の客には使わせたくないが、ジェフならば構わない、とクリスは何度かジェフに申し出た。しかし、ジェフはそこまでは申し訳ないからと、頑なに断り続けていた。

扉を開けるとカウチに座って待っているジェフの姿。が、普段ならジャケットを脱いでいるのに、まだ身につけたまま。着いたばかりなのだと思ったが、家庭教師は予想外の言葉を口にする。

「おかえり。さあ、出掛けるよ」

「出掛けるって、どこに？」

ジェフは鞆をクリスの手から奪うと、椅子の上に放り投げた。

「内緒。お母さんには、息抜きに連れて出る許可は貰ってるからね。こういう時に、普段からの信頼がものを言うんだよ」

芝居がかって片目をつぶってみせたジェフがクリスの細い腕を取り、今彼が入ってきたばかりの扉を開けた。

ジェフの車が止まったのは、郊外のアパートの前。

「さあ、着いた。降りて」

「ここは？」

「僕のアパートだよ」

「ジェフの？」クリスは目を輝かせて、車から降りた。今まで、ジェフの友人たちとフットボールや野球を見に行ったり、一緒にバーベキューをしたりもしたが、ジェフの家に来るのは初めてだった。

築年数の古そうな建物に入り、階段を上る。独居者用に見えるがジェフは一人暮らしなのか。そう言えば、家族の話をあまり聞いた事がない。クリスがティナの事についてもあまり語らず、ジェフも聞こうとしない事から、クリスもジェフが自ら語らない限り聞かなかったので、ジェフの家族がどうしているのかは知らない。もし万が一誰かが一緒に住んでいるなら、気疲れしそうだ。

「ジェフ1人？」

「そうだよ。1人っこでね。弟か妹が欲しかったな」

「僕も今は一人っ子だし、同じだね。僕は兄さんが欲しかったな」

言いながら、面映くなり、語尾が小さくなる。

「だからこうして上手くいってるんじゃないかな」

ジェフが振り返りながら微笑む。

「どうぞ。狭いけど、そこのソファにでも座っててくれよ」

クリスを奥に通すと、ジェフはアルコール程度のキッチンへと向かい、湯を沸かし始めた。クリスの方を気かけながらも、手首に目をやり、時間を確認している。

クリスの座ったソファと、軽食用にしか見えないダイニングセット、ドアもなく続きの部屋となっている奥には、書斎にでも置くような年代物の机と椅子、それにシングルベッド。狭く質素だが、清潔感がある。好奇心から部屋を見回したクリスは見とがめられないかジェフの方を見やったが、コーヒーの準備をしているのか、気にも留める様子はなかった。

と不意に来客を告げるブザーが鳴り、クリスは椅子から飛び上がらんばかりに驚いた。ジェフはコーヒーを3人分用意してこちらに向いていた。誰か来るなど聞いていない。不愉快さに体がざわつく。

小さなテーブルにコーヒーマシンを置くと、ジェフは踵を返した。

「ジェフ、誰が来るの？」

「課外授業の講師って所かな。大丈夫。僕も知ってる人だから、心配要らない」

ジェフが扉を開けると、入って来たのは波打つブロンドにジェフと同じグリーンの瞳をした若い女。クリスの周りにはリタと同じぐらいだろうか。しかし彼女よりは、全体的に媚びが見える。ジェフに何か目配せして耳元で何か囁くと、部屋に入って来た。

「あなたがクリス？」

リタとは違った。最近では、リタもクリスにすら向ける目つきが変わって来たが、この女は違う。確かに媚があるが、クリスを見る目はもっと優しげだった。まだ幼かった頃傍にいたメーガンのように。

「私はシルヴィア。あなたの先生のお友達よ。そんなに固くならないで、仲良くしましょう」

シルヴィアと名乗った彼女はクリスに近い位置に座ると自己紹介した。

「ジェフ、課外授業って・・・」

「それは彼女に聞いたらいい。じゃ、後は頼むよ」

シルヴィアの肩を軽く叩くと、ジェフはテーブルのコーヒーもそのままに立ち上がった。

「ジェフ、待って・・・」

「後は彼女に任せたから」

「任せたって、そんな」立ち上がったクリスを、今度はシルヴィアが遮った。

「放せよ」

「いいから落ち着いて、クリス。座って」立ち上がったシルヴィアが、座っていた椅子をクリスに寄せて、座り直した。

「課外授業って言ったのね、ジェフは」

笑いながら口にするコーヒーと共に、彼女にがまとっているフレグランスが香る。母がつけていたのはレール・デュタンとかいう甘い香りのもので、いつもハグされる度にむせ返りそうになったが、彼女のは違った。何か果物が混じったような、たくさんの花の香りがした。

「あなたを大人にしてやってくれて、頼まれたの」

大人に。そういう事か。クリスが異性に興味を示す様子がないのを、気にも留めていないと思ったのだが、まさか、手ほどきの相手を連れて来るとは予想もしなかった。しかし、そう簡単に頼めるはずのない事だが・・・

「私はそういった専門の仕事をしているの。エスコートクラブね。道端でお客を拾ってるようなのと一緒にしないでね」

シルヴィア的笑顔には、安物の娼婦とは違うという、自負が現れていた。

「でも、プロって言ったって、僕にはそんなお金はない」

「料金はジェフに貰ってるわ。知り合いだから格安にしてあげたけど。それに、こんな可愛い坊やが相手なら尚の事ね」

立ち上がったシルヴィアが、クリスの座るソファの肘掛に腰を委ね、体を寄せて来る。フレグラン

スが強く香ったが、不快感はなかった。見るからに豊かな乳房がクリスの頬に当たる。赤いマニキュアを施した細い指が髪を梳く。コーヒーの香りの息が顔にかかる。

「奥の部屋に行って、もっと仲良くなりましょう」

シルヴィアが囁いた。

結果は惨憺たるものだった、とクリスは思った。頭では分かっている、いざとなると、どうすれば良いか分からなかった。終始シルヴィアにリードされ、気づけば終わっていた。ひんやりとして、さらさらと触れるシルヴィアの指先は心地よかったが、柔らかくまとわりつく温かい肉から立ちのぼる、男とは違う匂いがフレグランスと混じり合っただけでクリスを包み、逃げ出したくなかった。

たかが、こんな事に父は夢中なのか、とクリスは白けた気持ちだった。

シルヴィアが身支度を整え、部屋を出た後、服を着たクリスはリビングのソファに戻り、白くうっすらと膜がかかった冷めたコーヒーをすすった。

戻ってきたジェフは、何も聞かなかった。聞かれたとしても、クリスも答えるつもりはなかったが。

「好き嫌いはどうあれ、経験はしておいた方がいいと思ったんだよ。怒ってるかい？」

クリスは黙って首を振った。ジェフは自分をからかったのではなく、ただ単純に経験を積ませようとしたのだ。それは決して悪い事ではない。知らなければ、それを批判する事もできないだろうから。

「でも、あまりお気に召さなかったようだね」ジェフは苦笑いを浮かべる。

「別に・・・」

「無理して好きになる必要もないさ。経験を重ねて好きになることもあれば、かえって嫌いになることもある。人それぞれなんだから」

「でも、子供を持つにはしなきゃいけない」

「将来子供が欲しいかい」

「それは・・・」

「まだ分からないよな。若すぎるし」

「欲しくない」クリスは自分でも意外なほどにきっぱりと、顔を上げたジェフの目を見て改めて答えた。「今も、将来も」重ねて付け足す。

ジェフの目はもう笑っていなかった。

夜も明けきらないうちに、クリスの部屋の扉が忙しなくノックされた。暗闇の中で目を開けると、ノックの音と共に、アナの声がする。

「クリス、起きて。おばあさまが亡くなりました。すぐに着替えて用意して」

祖母キャサリン。最後に会ったのはサンクスギビングの食事会だったから、あれから一ヶ月足らずしか経っていない。斧で頭を叩き割りでもしない限り死なない妖怪だとクリスは思っていたが、どうやら普通の人間だったようだ。これで父も安心してリタとの火遊びが出来るだろう。キャサリンしか住んでいなかったあの家を、別荘にする計画でも立てるのではないか。

眠い目をこすりながら起き上がると、まだパジャマにガウンを着込んだだけのアナが部屋に入って着た。腕にはクリスの為に用意してあったスーツの一式をかけて。恐らくは、久しぶりに父の運

転であの家に行くことになるだろう。

日は上り、家に着いた時には、既にこの家の家政婦が葬儀の一式を取り仕切っていた。キャサリンは自分の死期を悟っていたのか、全て手配してこの世を去ったのだろう。キャサリンらしい、とクリスは思った。家政婦がレイチェルを見るとすぐに話した所を見ると、あとは引き継ぐのだろう。レイチェルも葬儀屋の親父と思しき男と話した。たまにしか会わないここの家政婦はむっつりと愛想も悪く、自分の事は棚に上げてクリスは好いていなかった。子供の頃、まだティナと無邪気に共にここの裏庭で遊んでいた頃から。彼女もクリスの変わりようを何とも思っていないように見えた。その彼女から出されたコーヒーを父親と共にクリスは黙ってすすり、リビングの窓から見える裏庭に目をやった。自分の部屋にある写真で、ティナが座っていたブランコが見える。今でもあの頃の事は昨日のように思える。元より自分は何も持たない、全てが形だけのものだと思っていた。存在するのは、ティナだけだと。彼女を失った事は、全てを失ったも同じだと思っていた。ここに来る度に、痛んだ傷のかさぶたをクリスはわざと引っ搔いていた。そうしてその度に流れる血に、両親を許すことなく、決して彼らの期待に沿わずに裏切り続ける決意を新たにしていた。その痛みが、この何年かで緩和している事にクリスは気づいていた。ただ、それがどういう事かまでは、まだ頭の中で具現化していなかった。

牧師が祈祷書を読み上げている間中、母のレイチェルは声を押し殺して泣き続けていた。クリスの初めて見る母の姿だった。父のウィリアムは俯いてレイチェルの肩を抱いていたが、内心せいせいしているに違いない、とクリスは思っていた。何せキャサリンは自分の元上司で、目の上の瘤でもあったのだから。彼女の見立てで白羽の矢が立てられ、母のレイチェルと一緒にになったというのだ。とは言え、キャサリンが良く彼を思っていないのも、身に染みて分かっているはずだ。それはレイチェルも同じで、伴侶の胸を借りることもなく、さめざめと泣くだけで、ウィリアムに顔を向けようとしめない。

そんな両親の姿を、クリスは冷めた目で眺めていた。参列しているのも近所のガーデニング仲間の老人たちと、出入りの食料品店の男ぐらいだという。祖母の死を本当に悼んでいるのは、レイチェルと、同じ孤独をかこつ仲間だけではないだろうか。

もし両親がどちらかが死んでも自分は悲しまないのではないかとクリスは思っている。体裁も繕わねばならないから、悲しむふりはするであろうが、本心からはできないだろう、と。

そして自分が死んだら、誰か悲しむだろうか。クリスは思う。

脳裏に薄ぼんやりと浮かびかけた何かが像を結ぶのを打ち消すように、クリスは軽く頭を振った。

キャサリンの葬儀以降、レイチェルは病院の理事室に出勤する事なく、塞いでいるようだった。食事もアナが自室に運んでいるという。キャサリンの死で気分の軽くなった父ウィリアムと夕食を共にする事はあっても、レイチェルの姿を、クリスは葬儀以降見かけなかった。かといって、ウィリアムと会話が増えたわけではない。相変わらずダイニングルームは冷え切っていた。供される

食事の温かさとは裏腹に。

ジェフはいつものように、日参している。クリスとの授業の後、毎日形式的にリビングに寄り、アナの淹れたコーヒーを飲んで帰る。ただ違うのは、レイチェルが自室に引きこもっている事で、察したアナがクリスにも声を掛けることだ。その後は暫く他愛もない会話に興じて、それからジェフは帰って行く。

その日も勉強を終え、ジェフが立ち上がると、クリスはアナに言われるまでもなく、リビングと一緒に向かおうとした。

「今日は奥様が起きてきてますよ」

アナのその言葉は、ジェフではなく、クリスに向けられたものだろう。あからさまにクリスは口元を歪ませ、眉間にしわを寄せた。ジェフが苦笑いしてクリスに向かって挨拶のように手を挙げると、クリスはむっとした顔のまま自分の部屋に戻った。

(やれやれ、これで楽しかった時間が減ってしまった)

ため息をつき、カウチに腰を下ろしてふと思う。楽しかった。そうだ、認めなければならない。ジェフとの時間が一番楽しいのだと。母が起きてきたことで、その時間が奪われた-----元は、母とジェフが話をしていた時間なので、クリスはそれを返却したに過ぎないのだが-----のだ。

ティナが死んだ時とは随分と違う、とクリスは思っていた。

ティナが飛び降りた直後こそクリスを詰ったものの、クリスにも目をかけ、いや目を離さないよう、クリス自身が鬱陶しく感じるほどに干渉してきた。同時に祖母キャサリンをこのアパートに呼び寄せ、まるで姉妹のように一緒になってクリスを構いたてた。病院の仕事も穴を開けなかった。

それが、キャサリンの死と共にこの変わりようである。

自分の部屋に閉じこもって出てこなかった母は、クリスの見た事のないものだった。

もしかしたらレイチェルは、クリスの母であるよりも何よりも、『キャサリンの娘』であり、それが一番だったのではないか。クリスにとってティナが全てであったように。それがクリスの出した結論だった。

(いっそ、乱入してやろうか)

そして、レイチェル相手に、母を慰める孝行息子の役どころでも演じてみせようか、と悪戯心が働く。

早速立ち上がり、クリスは部屋を出た。母に何て言ってやろうかと考えながら廊下をゆっくり歩き、リビングのドアの前に立った。ノックをしようと握った手を上げて、止めた。ドアの向こうから声がする。話をしていれば声がするのは当然のことなのだが、様相が違う。高く、か細い声がする。

クリスはキッチンのある方向を見てアナの姿がないのを確認してから、ドアに耳を当てた。

やはりか細く高い、女の声だった。つまり、レイチェルのもの。媚びた、嬌態を作った声。それが何を意味するかは、先日の『経験』がなくとも分かっている。そして、その相手はジェフ。

血の気が引くとはこういうことか、とクリスは思った。動けない、と思った体を動かし、のろのろと自分の部屋に戻る。

裏切られた。

ジェフも自分の味方ではなかったのだ。信頼しかけていた自分が馬鹿だったのだ。怒りと、そして絶望・・・いや、最早怒りしかなかった。やはり自分には誰もいなかった。元通りになるだけだ。なのに、このもやもやとしたものは何なのか。

部屋に戻るやいなや、クリスはカウチの上のクッションを壁に投げつけた。続いてベッドの上の枕を2つ続けて。自分のデスクの椅子、更にはジェフが普段使っている椅子を投げた。

自分も好きではない、と言っていたクリスの母と懇ろになったジェフと、そして信頼していた、しかけていたジェフを奪った母、こともあろうに2人して乳繰り合うなど。吐き気がする。

クリスはベッドに飛び乗ると、マットレスを拳で殴りつけた。リネンの表面で、関節が赤くなるまで、何度も、何度も。

帰宅すると、すぐに自分の部屋に向かうのが習慣なのだが、この日は気が重かった。昨夜もよく眠れなかった。見たわけでもないにも関わらず、ジェフとレイチェルが体を重ねている夢まで見た。母の体つきが若々しく見えたのは、恐らくシルヴィアとの記憶のせいだろう。

自分の部屋のドアの前で、大きなため息をひとつ。胃がきりきり痛むのを自覚しながら、ドアノブを回した。

「おかえり」

屈託ない笑顔で、何も知らないジェフがクリスを迎えた。クリスは顔が強張るのを感じた。

「どうしたんだい？怖い顔して」

笑うジェフが憎らしかった。自分に色々と教えて味方のふりをして、陰で笑っていたのだと思うと、更に胃が痛み、不快感のあまり酸っぱいものが胸元あたりから上がってきて喉を焼いた。思わず、小走りにカウチまで行き、鞆を放り出して倒れこむ。

「どうしたんだ。大丈夫か」

吐き気と痛みで口と鳩尾を押さえ、座面に突っ伏すクリスの背中を、暖かな手がさする。

「お母さんに知らせ・・・」

「やめろ！」

思ったよりも大きな声が出た。

「大丈夫だから・・・僕に触るな」

クリスの背中に軽く乗せたジェフの手が止まった。

「その汚らしい手をどけるよ」

感情を排したような声で言ってゆっくりと体を起こし、ジェフの手を払う。ジェフは、すぐにクリスの態度の変化の原因に気づいたようだった。それはクリスにも明らかだった。カウチの傍らに膝まづき、自分を無表情に見るクリスを見る目は穏やかだった。

「見たのかい」

クリスはゆっくりと頭を振った。

「見てない。でも聞こえた。何が起きてるのかなんてすぐに分かったよ。母さんの声が聞こえた」

「そうか・・・」

「ああやって、母さんに取り入ってたんだ。僕と同じく母さんが好きじゃないって？よくも騙して

くれたよな、何年もかけて。すっかり信じこんでたよ。かといって今更別の人に変えてくれっこないだろうしね。けど、もう金輪際信じない」

まくし立てながら、それでもクリスは思っていた。否定してくれ、と。昨日の事は母の誘惑の結果で本意ではなかったと。

「クリス」

ジェフの声は穏やかだった。

「信じるかどうかは君次第だけど・・・昨日の『あれ』は、君のお母さんに誘惑されたものだった。直接言葉では言わなかったけどね。そうするように仕向けるような事を言われた。君のお祖母さんが亡くなって、お母さんは精神的に大きな打撃を受けて、立ち直れないと。お父さんは傍にも寄りとうとしない。自分には抱きしめる腕が必要だってね」

本当にそうなのだろうか。クリスの期待した通りの言葉が、かえって疑念を呼ぶ。確かにジェフの言う話は筋が通っている。

「大人は汚いって思うかもしれないけど、大人は汚いものだ。残念ながら。だから君は亡くした妹さんを愛してる」

「ティナの話はするな」

「君が怒っているのは、僕も汚らしい大人だったからか？君のお母さんと寝たから？君のお母さんを奪ったから？なんと言っても君の親なんだし・・・」

「違う・・・違う・・・」

では何故怒りを感じたのか。そもそも自分は本当にジェフに怒っているのか。一体何に、誰に怒りを感じている？

クリスは体を起こし、脳裏に浮かんだ考えに自分で戦慄した。自分が怒っているのは本当は・・・

顔をジェフに向けると、至近距離に彼の顔があった。クリスよりもやや大きく、節だった指がクリスの顎を捕える。その手は首に回り、ジェフの方に引き寄せた。覆いかぶさったジェフは唇が触れるぎりぎりの所で頬を寄せ、クリスの耳元で囁く。「君のお母さんに僕が取られると思ったんだね」

ジェフのつけているフレグランスが体温と共に彼のシャツの胸元から立ちのぼる。嗅ぎ慣れたその香りは心地よかった。

首にあった手は下がって背中に、もう一方の手がクリスの頬に添えられ、吐息がかかり、唇が覆われた。

クリスはそれを受け入れた。

ひんやりとした枕に顔をうずめ、クリスは細く開けた目で隣に横たわるジェフを見た。二人とも息の荒さは収まり、脱力感の残る体をベッドのマットレスに委ねていた。

こうして勉強の時間の後に体を重ねるようになって、数週間になる。毎日ではないが、数日に1度、ジェフが『今日はここまでにしよう』と早めに切り上げるのが、その合図になっていた。念の為にドアはロックし、机の傍に戻ってきたクリスをジェフが抱き寄せ、そのままベッドへと誘導する。

男女と同じような形を取らずとも、色んな愛し合い方があるのだ、とお互いを快楽に導くやり方も教わった。そんな日の夜は、ジェフとの行為を思い出し、ベッドの中で手がパジャマの中に伸びそうになる事はしばしばだった。それでも何もしなかったのは、どこかでそれを気恥ずかしく思っているせいだ。

あの日、何も抵抗せずにジェフを受け入れたことに、受け入れたことで彼に向けていると思っていた怒りが消失したことにクリスは自分でも驚いていた。その時初めて、その怒りはジェフを自分から横取りした母に向けられたものだった、と自覚したのだ。同性でありながら彼を受け入れたのは、その時の感情の勢いによるものだと思っていた。現にあの時は抵抗する気すら起きなかったが、後に改めて求められ、戸惑ってしまった。夢うつつの出来事だと思っていた事が、その夜バスルームで現実なのだと思い知らされ赤面し、数日後、クリスを抱きしめて来たジェフの腕から逃れようとした。熱い湯を浴びた時に感じたちりちりとした痛みは収まっていた。『その時』も何が起きているのか分からないままに受け入れたので、痛みへの恐怖もなかった。ただ、本来あるべき形ではないことへの戸惑いだった。

「こういう愛情の形もあるって事だよ」

クリスの体を抱きすくめたジェフが、こめかみに唇を寄せて囁いた。

「愛情？ジェフはじゃあ、その・・・」その先を口ごもる。

「そうだな。そうかもしれない。思わず、こうしたいって思って我慢出来なくなったんだから」

「ジェフはじゃあ、男の方が好きなの？」

「クリスはどうだい？こないだ僕を拒否しなかつたらろう？」

「分からない・・・ジェフだから、かもしれない」

「僕もきっとそうなんだろうと思うよ。これまで経験がなかった訳じゃないけど、自分からそうしたいって考えた事は今までになかった」ジェフの緑の瞳がクリスの鳶色の瞳を覗き込む。

「君は僕だと思ったのかもしれない」

「ジェフが？それってどういう意味？」

「いつか話せる時が来たら話すよ。まだ、今はそういう気になれないんだ」

ジェフの冷たい唇がクリスの額に触れ、それ以上の質問を封じた。

土曜日。金曜の夜から降った雪は歩道の脇に雪だまりを作る程度に積もり、同じアパートに住む子供達が泥にまみれていない雪をかき集めては雪だるまを作り、それぞれの母親から貰ったニンジン顔を顔に突き刺していた。ある者は残った雪を友人同士でぶつけ合い、朝から嬌声をあげてはし

やいでいる様子が聞こえてきた。

『平日は勉強しても、休日ぐらいは息抜きしなきゃね』

大学入学許可の試験の準備は少し早いと言いつつも、普段は手を抜かないのだが、メリハリは必要だとジェフがレイチェルを諭したという。その説得手段が何であったのか、クリスにも予想はついていたのだが、その不満はジェフにぶつけられずにいた。子供っぽいと馬鹿にされるのがいやだったのだ。

「今日はこちらに泊まるかい？お母さんに許可は貰ってる」

クリスが車に乗り込むと、ジェフが開口一番言った。

「いいの？」クリスは我知らず目を輝かせて聞いた。外泊は、夏休みに海外へ行く以外、キャサリンのいたあの家、外泊とも言えないあの家しかないのだ。ましてやジェフとだ。クリスにとって嫌な筈はなかった。

「もちろん」ミラー越しにジェフが笑顔で答える。「今日から明日にかけて、思いっきり自堕落に過ごすんだ。アパートから一步も出ないで済むように冷凍食品の買いだめもばっちりだからね」更に鏡越しにジェフはにやりと意味深な笑いを浮かべた。

ここに来るのは、以前シルヴィアが来た日以来だった。

部屋の雰囲気はさほど変わらないが、少し整頓された様子だった。1人掛けだったソファはカウチになり、奥にあるベッドはセミダブルに変わっていた。

「さすがに部屋が狭いからダブルとはいかないけど、2人でシングルベッドに寝るんじゃ、床に落っこちちゃうだろ」

奥を覗き込むクリスに向かって、車から運び入れた冷凍食品を冷蔵庫にいれながらジェフが言う。今夜ここで『する』のか、と、ジェフは何も言っていないのに想像し、1人クリスは赤面する。そんな自分をごまかすように、前に訪れた際にはよく見ていなかった机の前に立って、ブックエンドの本を眺めた。解剖学のテキストらしい本や、医学生とも思える難しそうなものが並んでいた。そう言えば、初めてクリスの家に来た時は大学生と言っていた気がする。大学生が、しかも、ここにあるような本を使う学生がこんなに暇なわけがない。更にこの狭い-----クリスの部屋からしてもこの机のある部屋は手狭だった----アパートにこの大きな、使い込まれて飽色の艶も出ている年代物の机は似つかわしくない。父親の書斎に置いてありそうな代物だった。

「大学、行ってないの？」

キッチンにいるジェフの方を振り返って聞く。

「今は休学してる。クリスが大学に入る頃には復学予定だよ」

「もしかして僕を待ってるの？」

「まさか！学費の問題だよ」

笑うジェフの声は、若干皮肉げに聞こえた。

「理系だと尚更ね。うちは両親共に僕が二十歳の時に死んで、もういないし」

はっと思わず息を飲んだ。この年季の入った机も、もしかしたらジェフの父親のものかもしれない。

「その机も、親父の書斎にあったものだ。借金だらけで死んでね。この机が遺産みたいなものだな」

「兄弟、いないの？」

「いない。僕が生まれる前に、母は流産したらしいけど。一人っ子なんだ。親戚も遠い遠い、従兄弟の更に従兄弟ぐらいの人しかいない。誰か近い親戚でもいれば、親父もあんなに借金せずに済んだかもしれないけど・・・」

答えるジェフの目はクリスを通り越し、その大きな父の机を見ていた。

この人も1人なのだ。大事な人を失い、1人きりになってしまった。だからこそ、クリスは自分だと言ったのではないか。

両親がいるだけクリスの方が遥かに恵まれている、とまで考えは及ばなかった。この世からいなくなってしまう事よりも、身内がいながらにして孤独である方が生き辛いではないか。それがクリスの結論だった。ティナを失った時の絶望は、今も忘れたことはない。

うごめいていた指を追いかけるように、ジェフの唇が下半身へと降りていく。そけい部まで到達すると強く吸い上げ、薄赤い跡を幾つも残して脚へとさらに移動する。クリスは息を荒げ、声があがりそうになるのを、握りしめた手の甲を噛んで我慢した。指は狭い所へと潜り込み、特定の箇所を探るようにゆっくりと動く。不快とまではいかずとも、快いとは思えない感触が、クリスに鳥肌をたてさせる。『その箇所』を探り当てた指がさっきとは違った動きを見せた時、クリスは体を釣り上げられた魚のように跳ね上がらせた。ジェフが薄く笑ったのか、微かなため息ほどの息が内腿にかかる。そこからは、ジェフの動きに完璧に翻弄され、クリスは息と共に我慢しきれずに声を間断なく上げ続けた。

のしかかるジェフの体の重みを心地良いと感じながら、自分より少し逞しい男の背中に腕を回す。股関節が悲鳴をあげそうになりながらも、ヒーターの温かさだけではない熱が体を温め、どちらのものかは分からなくなった汗で、重なった体は湿っている。抱きしめてくる腕は、今だけでも甘えても良いのだ、という許可証のように思え、筋肉の隆起に頬を摺り寄せた。

抱きしめてくれる腕は、まだクリスもティナも小さかった頃に奪われた。二人を産んで、すぐに仕事に復帰した母レイチェルに抱きしめてもらった記憶はクリスにはなかった。

まさしく『乳母(ナニー)』だった女性は、確かテレサといったか。プリ・スクールに行く頃には辞めていった。後で後任のメーガンに聞いた所によると、子供達がなつき過ぎて、甘え癖がつくからと母レイチェルが辞めさせたという。テレサはアナと一緒に台所へ行き、よくクッキーを双子の為に焼いてくれ、抱きつくと、その甘い匂いがした記憶がクリスにはある。ままごと気分、よくティナと動物の型でクッキーの型抜きをしたものだった。彼女は仕事と割り切っていたかもしれないが、クリス達にとって、彼女のかけてくれる愛情は本物だった。

以来、たとえどんな形であれ、愛情をもって抱きしめる腕は2人から永遠に奪われた。メーガンは、決して2人を『甘やかさなかった』から。

今はバニラとバターの匂いの代わりに、汗に混じってジェフのフレグランスの香りが鼻腔をくすぐり、それを心地よく感じてクリスは息を深く吸い込む。

ジェフのゆったりとした動きが急に速まり、クリスの声も同じくして追い立てられるように、早くリズムカルなものに変わる。

そうして何度繰り返されたか。最後は、半ば気を失うように眠りに落ちてしまった。

目覚めると隣にジェフの姿はなく、リビングのテーブルにいた。クリスはきしむ体を起き上がらせ、何か着るものを、と周りを見回す。昨夜シャワーを浴びた後に着ていた、パジャマ代わりのトレーナーとスウェットがあった筈だった。

足元に脱ぎ散らかされたものを集めて身に付け、テーブルの方に向かう。ジェフの顔を見ると、昨夜の事を思い出して気恥ずかしくなり、思わず俯き、声も小さくなる。「おはよう。早いね」「早くないよ。今、もう11時前だよ。よく寝てたね」

そう言って笑うジェフは、俯くクリスの顔を覗き込んでくる。

「それだけ体力使っちゃったかな」

その言葉に赤面し、クリスはさらに言葉に詰まる。

「冗談だよ。普段、それだけ気を張ってるって事じゃないかな。リラックス出来たんだよ。いい顔してるよ。そんな晴れ晴れとした顔は、見たことなかった」

確かにそうかもしれない、ジェフの言う通りかもしれない。家にいても、周りに自分の味方は誰もいない。ジェフがいるのも、数時間の事だ。たとえ長期休暇であっても、午後からしかやってこないのだから。彼が去った後は、彼を待つ午前中よりも、孤独感はいや増した。

だが、今朝は違う。

体は昨夜こき使われたことで不平の声をあげているが、気分はすっきりしている。目の前のコーヒーも、どこで飲むよりも旨く感じた。2人は、ただ黙って窓の外を眺めながらカップをすすった。交代でシャワーを浴びると、あっという間に昼になる。前日にジェフが『自堕落に過ごす』と宣言した通り、昼食は冷凍のTVディナーを。ランチョンマットを持ち出して、寒いから、と言い訳をして、ベッドの中で食べた。

「食後は運動しなきゃね」と、そのままジェフに手を引かれて潜り込み、じゃれあい、そこからはまた昨夜と同じ。クリスは声が大きくなるのを我慢した。体も徐々に馴染んできている。その分、受け取る快感も増してきたように感じられた。それをジェフは分かっているのか、焦らしにかかる事もある。もう、すぐそこまで来ている頂上を前に、急激に動きを止め、無意識に切なげな表情で不満のため息を漏らすクリスの顔を、興味深げに見つめる。分かっている、焦らしているのだ、と悟ったクリスは照れ隠しにふてくされたような顔を逸らした。ジェフが小さく笑いながら頬に、額に、唇にくちづけて来る。舌の動きにクリスが応えると、最高地点に向かって、また2人は動き始める。

いつの間にか、うたた寝をしていようだった。

目を開けると、すぐそばでジェフがクリスの顔を見つめていた。なんとも評し難い表情で。微笑んでいるのか、悲しそうなのか、哀れんでいるのか。クリスには判じがたかった。

「以前、君は僕だ、と言っただろ？」クリスはうなずいた。

「君も僕と同じ『ひとりぼっち』だからだけど・・・僕には親に愛された思い出も、親を愛した思い出もある。君にはないものだ。君には両親がいる。だけど、残念ながら、君には愛された思い出も記憶もない」

「ティナがいた」

「そう。早くに亡くなった君の双子の妹、クリスティーナだけが、唯一無二の存在だった。彼女がいない今は、僕より遥かに孤独なのかもしれない。これから、誰かを見つけない限り」

今はジェフがいる、と喉まで言葉が出かかったが辞めた。そう思っているのは自分だけかもしれない、と不安がよぎる。自分がいる、と彼が言ってくれないかと期待している自分がいた。

「たとえ、誰も味方がいなくても、強くなればいい。いいね」

ジェフの手がクリスの髪を撫でた。

楽しい時間は、普段の生活よりも早く終わってしまうものだ。

夕方まで、ジェフの言った通り『自堕落な』時間を過ごし、彼の車でクリスは自宅アパートに送り届けられた。明日からは、また、普段の生活が始まる。しかし、先月はじめ頃までとは違う。体の繋がりが、ジェフとの心の結びつきを強くした、とクリスは感じていた。今、この世界で一番信頼出来る、自分をさらけ出せる相手だと。もちろん、ティナとは比べようもないのだが、彼女の死後、誰1人自分の世界にいなかった子供の頃に比べれば、遥かに幸せだった。

そんなクリスに比べて、ジェフの様子は変化していた。勉強中にはきにならない事だが、ふとした拍子に訪れた沈黙の中で、ジェフは何か物言いたげな様子を見せる。クリスが問うても、首を振るだけだった。それは、ベッドの中であっても。クリスを抱く腕の強さも、愛撫も、変化は見られない。より一層、頻度を増したほどである。それにはクリスも喜びをもって応えた。

一度は去り際に強く抱きしめ、じっと黙っていた。どうした、と聞いても、やはり答えない。更に腕に力を入れるばかりであった。

その日も、ベッドから起き上がり、身支度を終わると、ジャケットを掴んだジェフが、やはりクリスを抱きしめて来た。

「ねえ、どうしたの？やっぱりおかしいよ。何があったの？」

「クリス、生きたいか？」

「どういうこと？」唐突な質問にクリスは顔を上げようとしたが、ジェフの腕の力は強く、彼の肩に押し付けられた頬はびくともしなかった。彼の右手が離れ、手に持ったジャケットを探るように振っていた。そのジャケットがカーペットの上に落ちた時、何かがクリスのこめかみに当てられた。冷たく、固い、金属の感触が。続いてかちり、と音がする。映画で見て、クリスもそれをしていった。

「ジェフ・・・僕を殺すの？」

内心、パニックを起こしそうだった。しかし、彼に殺されるのなら、という気持ちもあった。どうせ、この先どうして生きて行くか希望すらないのだ。かと言って、自ら命を絶ったティナほどの自尊心すらない。もし自分が死ねば、跡取りもいなくなり、母も大いに嘆き悲しむだろう。

彼と知り合い、好きになってしまった。それだけしか今のクリスにはない。その彼がそうするというのなら。

「僕の父も医者だった。そう、『だった』んだ。もうこの世にはいないからね。父も病院の院長だったよ」

ジェフはクリスのこめかみに拳銃を突きつけたまま、語り始めた。

「僕が君の家庭教師になるずっと前の事だ。君のお母さんが理事長をしている病院ほど大きくなかったけど、それなりに患者さんからの信頼も集めてたよ。でも、それも・・・優秀なスタッフがみんな引き抜かれたり、より高い給料をくれるからって、新しく出来た病院に移ったんだ、急にね。それでも親父を慕ってくれてた何人かは残ってくれて頑張ってくれてたけど、それも親父が癌で倒れるまでの事だった。体調が悪かったのは知ってたけれど、かなり我慢してたんだろう。倒れた時にはもう転移がひどくて、開胸したものの、患部を確認しただけで手術室から出てきた。残ってた

病院のスタッフには他の勤め先を紹介して、たたむしかなかった。病院をたたんで土地を売っても、治療費は嵩む一方だった。延命措置だけだったしね。モルヒネの量も増えるだけで、看病にかかってたお袋も疲れ果ててた。それを苦しめた親父は、ある日拳銃をくわえて死んだ。先に母さんを殺して、『ごめん』とだけ、メモを残してね。せめて保険金だけでも僕に残そうとして・・・それも借金が病院名義で残っていて、ほとんど残らなかった。大学を続けるにもお金はある。休学して、バイトを掛け持ちして、シルヴィアと知り合ったのも、その時だ。僕も同じエスコートクラブにいたんだよ。お客は男女問わず。君の家庭教師兼ナニーになるまでね」

つまり、男性との経験がある、というの、そういう事だったのか。クリスは妙に冷静に、ジェフの語る話を納得しながら聞いていた。

「父がまだ入院中、病気の事を知った、辞めてったスタッフが何人か見舞いに来てくれた。その時に初めて知ったんだ。あるエージェントが集中的にうちの病院のスタッフを引き抜いたって事をね。そのエージェントのクライアントが、君のお母さんだったって事も。病気のせいだったのは分かってる。でも、もしスタッフが残ってくれていれば、彼らだって優秀で、それで病院はやっていったのに、君のお母さんが」

ジェフが言葉に詰まったのは、泣いているのか。クリスを抱く腕が、触れ合う肩が、微かに震えていた。

「君を殺せば、お母さんが嘆き悲しみ、一番の復讐になる。そう思ってナニーの仕事について。でも・・・君は殺せない。孤独に生きてきただけの君を殺すなんて、やっぱり出来ない」

「いいよ。ジェフになら、殺されても」

「だめだ。あのお母さんの元に生まれて、妹まで失って、僕には無理だよ。でもね、それでも、君のお母さんにはせめてもの仕返しはしたかったんだよ・・・」

と、クリスは急に突き飛ばされた。信じがたい事が起きると、全てがまるでスローモーションのように見えるというのは真実なのだな、と頭の片隅で思いながら、目の前のジェフを止めることは出来なかった。乾いた銃声と共に、目の前が真っ赤になった。そのままジェフはカーペットの上に崩れ落ちた。

また、頭の周りに花が咲いたように、カーペットが真っ赤な血に染まった。

そこから先は、クリスは記憶がなかった。

アナが後に語ったところによると、獣のようにわめき声をあげていたという。言葉にもならず、獣に育てられた子供のようなようだった、と。騒ぎを聞きつけ、鍵のかかったドアを、アナが体当たりで開け、その惨状を発見したのだ。

アナに肩を借り、ひとまずはティナのものだった部屋に移り、ベッドに横にならされ、そのまま丸一昼夜、クリスはこんこんと眠り続けた。その後に警察の事情聴衆を受けた。子供の頃のように行かなかったので、母の事も含めて全て担当刑事に話した。話した所で、母のやった事は合法であり、彼女を罪人に出来るよしもなかった。

ジェフは、クリスのナニーとなって家庭に入り込み復讐を企てたものの、諦めて観念した上での自殺、ということで片付きそうだった。

(違う。ジェフも、母さんに殺されたんだ。ティナみたいに。僕から、みんな奪っていった)

ジェフが自分の頭を撃つ直前の顔が、目に焼きついていてた。クリスを見て、微笑んだのだ。口が

開いて何かを言った、ような気がした。読唇術は使えないので、なんと言ったのかは分からなかった。しかし、彼の笑顔は優しかった。

そのジェフはもういない、引き金を引いたのは彼だが、実際に死に迫りやっしたのはクリスの母親だとして、クリスには思えなかった。そんな親の子である自分を、ジェフは殺せない、と自分に銃口を向けた。クリスの母を苦しめたい故に、と。苦しめるまではいかないのではないか。我が子の家庭教師が自宅で自殺したのだ。スキャンダラスであり、何が背後にあるのか、と周囲はうるさく騒ぐだろう。いや、実際にクリスは好奇の目で見られ、学校でも腫れ物を触るような扱いを受けている。

自分は罪人の子なのだ。本当は、あの時ジェフに殺されればよかったのだ。または一緒に死ねば。

(なぜ、一緒に死のうと言えなかったんだろう)

それが唯一の心残りだった。自分で死ぬ勇気すらないのだ。なんて自分は意気地なしなのか。

(僕を誰か殺してくれ)

カーペットが取り替えられたクリスの部屋、いつもジェフが座っていた椅子には、まだ彼のオードトワレの香りが残っていた。クリスは背もたれを抱きしめ、鼻をすりつけた。

Epilogue

刺激を求めて移った先は、勤務している数も多く、少しはクリスを楽しませてくれそうだった。新たな住まいも適度に住める状態に整った。仕事への不安は全くない。それよりも、何もしていない方が不安なのだ。自分を駆り立てるように、楽しめる対象を、相手を求めた。たとえ、一晩だけのことであったとしても。

「失敬」

低い声を共に、分厚い肉体が体に当たる。振り返ると、術着を着た上からも分かる、逞しい体つきの医師だった。黒に近い、真っ直ぐで後ろになでつけた髪、分厚い唇、そして何よりも印象的なのは、やや潤んで見える、蒼玉のような目だった。冷酷そうにも見えるその男に、クリスは興味を抱いた。

「いや、こちらこそ」

会釈して、その場を立ち去る。

ここで会ったという事は、診療科目が違っていても同僚という事か。いずれ、お近づきになる機会もあろう。

帰宅したクリスがエレベーターに乗り込むと、待ってくれとの声がした。

振り返ると、昼間に病院の廊下であった、蒼玉の男だった。傍にもうひとり。彼と同じ程に暗い茶色の巻き毛に、明るい茶色の瞳の男。蒼玉の男よりは愛想が良いのであろう。クリスに向かって『どうも』と笑顔に向けて来た。クリスもよそ行きの笑顔を返す。どうやら、『仲間』のようである。

同じコンドミニウムだとしたら、これから少しは予想よりお楽しみが増えそうだ、とクリスはほくそ笑む。何もしていなければ、謎の焦燥感に掻き立てられる自分を慰撫する為に。

自分を痛めつけてくれる誰かを、罰してくれる誰かを探している事に、まだクリスは気づいていなかった。